シンポジウム

3. 臓器の線維化とその治療

司会者のことば

司会 杉山幸比古¹⁾

司会 三浦総一郎²⁾

臓器の線維化は加齢，老化と密接にリンクしており，生物，人間にとって避けて通れない問題である．昨今の高齢化社会の到来とともに極めて重要な問題として浮かび上がってきている．肺の分野では，いわゆる“肺線維症”と呼ばれる間質性肺炎は難病に指定されており，中でも特発性肺線維症(idiopathic pulmonary fibrosis：IPF)は予後の悪さからみると，肺癌を含む様々な癌の予後にも匹敵する，あるいはさらに悪い疾患として有名である．IPFの病因論としては，以前は肺の間質に炎症が起きて，この炎症の不適切な治癒機転により線維化が生じると考えられてきた．しかしながら，近年の研究の進歩により，炎症はむしろ副次的なものであり，主役は慢性的に繰り返し起こる肺胞腔の上皮細胞傷害とその不適切な修復の過程で，コラーゲンなどの産生，蓄積によって線維化が進展していくことが明らかにされた．このことは，抗炎症薬

の代表であるコルチコステロイドや免疫抑制剤がIPFに効果を示さないことから裏付けされる．そういった中で，全く新しい抗線維化作用を有するピルフェニドンという薬剤がIPF治療に登場し，効果が実感されている．

ピルフェニドンは肺以外にもラットでの腎線維化抑制，マウスの心室肥大抑制，ラットの心筋リモデリング抑制，ラットの肝線維化抑制など他臓器の線維化に対する動物実験レベルでの効果も報告されている．ピルフェニドンは作用機序として線維化のkeyサイトカインであるTGF- β の抑制作用が示されている．

本シンポジウムでは，肝臓，腎臓，肺，心臓，骨髄という異なる臓器での線維化の共通点，相違点を浮き彫りにして，この極めて重要な病態について各臓器での横断的な新たな視点が芽生えることを期待したい．

¹⁾ 自治医科大学呼吸器内科，²⁾ 防衛医科大学校

111th Scientific Meeting of the Japanese Society of Internal Medicine: Symposium: 3. Fibrosis of the viscera and its treatment: Introduction.

Yukihiko Sugiyama¹⁾ and Soichiro Miura²⁾ : ¹⁾ Division of Pulmonary Medicine, Jichi Medical University, Japan and ²⁾ National Defense Medical College, Japan.

本講演は，平成 26 年 4 月 13 日（日）東京都・東京国際フォーラムにて行われた．